

がんセンターたより

第33回日本内分泌外科学会総会報告

乳腺内分泌外科部長 岩崎 博幸

2021年6月3日（木）と4日（金）に長野県軽井沢町のプリンスホテルウエストで開催した第33回日本内分泌外科学会総会の報告をいたします。

開催までの道のり

新型コロナウイルスの感染状況は前年よりさらに悪化し、特に年が明けてから緊急事態宣言が出ていなかったのは3月22日～4月24日までのおよそ1カ月間のみでした。このような状況で、150もの演題が集まりました。5月の連休明けに第4波のピークとなり、すべてが自粛モードとなりました。約半数の口演はビデオ発表となり、一部ハイブリッド方式にせざるを得なくなりました。多くの先生方から発表形式の問い合わせや苦情も沢山いただきました。

学術集会の是非

学術集会は不要不急なのか問われれば、必要と胸を張って答えられます。ただし、不急であろうと言われるとそうかもしれません。コロナ禍で、人々の感情が鷹揚でなくなり、こんな時期に全国規模の集会などけしからんと言われるかもしれません。特に医療従事者は何か問題が起こると、強く非難されることは容易に想像できました。総長はじめ病院関係者に学会開催の出張許可をいただき本当に感謝いたします。

現地開催の魅力

6月2日前日の委員会は約半数の参加者で低調でしたが、久しぶりに対面での会議が行われ、滞っていた懸案事項も動き出した感がありました。そして、6月3日学会初日を迎えました。写真は会場入り口で不安そうに参加者を待つスタッフです。蓋を開けてみると、現地参加者は200名を超え、意外にも会場では活発な討論が行われました。久しぶりの現地開催に参加していただいた会員は一様に学会を楽しみ、情報交換や親交を高めることができました。現在第5波の真っ只中ですが、結果的に絶妙のタイミングで学会を開催でき、とても運が良かったと思います。



総会当日 会場入り口にてスタッフ記念写真
左から 黒田香菜子、戸田宗治、岩崎博幸、山崎春彦、撮影者：村山大輔

地域連携室について

当部署では、他院からの紹介患者や逆紹介患者に関する事務連絡や診療情報の提供、診療情報公開サービスの受付・管理、地域連携広報誌の発行などの業務を行っています。

最近の取り組み

- ① コロナ禍の中、新たな医療連携の構築を目指して、地域医療連携システム「メディマップ」を導入しました。現在の連携施設数は97件であり、引き続き顔の見える連携を増やしたいと考えています。
- ② 当院では医療連携のキーワードとして「二人主治医制」を患者さんに紹介しています。昨年から「がん診療連携施設登録証」を導入し、地域の医療機関の方に登録証の掲示を提案させて頂いています。
- ③ コロナ禍で集合・対面研修が行い難いため、地域の医療機関とオンライン勉強会を開催しています。
- ④ 新たな患者サービスとして、YouTube 動画「神奈川県立がんセンターチャンネル」を病院ホームページに開設しました。詳しくは右記のQRコードをスキャンして下さい。



※QRコードは(株)デンソーウェブの登録商標です。

医療機関の皆様へ・・・

引き続き、それぞれの医療機関の診療機能をお互いに活かせるような連携を進めていきたいと思っております。今後とも、どうぞよろしくお願い申し上げます。

連絡先／地域連携室

電話：045-520-2272
 FAX：045-520-2727
 メールアドレス：gan-chiren@kcch.jp

AI をがん診療で活用する

- 遺伝診療科と臨床研究所の共同研究が最優秀賞を受賞しました -

遺伝診療科 部長 成松宏人

遺伝性乳がん卵巣がん症候群といった遺伝的要素の強いがん（遺伝性腫瘍）の存在が知られるようになり、ますますがんの分野での遺伝カウンセリングの需要が急増しています。当センターでも2017年に遺伝診療科を開設して診療に当たってきました。しかし、特に全国的にみれば、それを担う専門医療職、特に、遺伝カウンセラーはまだ不足しているのが現状です。そこで、遺伝診療科では、臨床研究所がん予防・情報学部と共同で、人工知能（AI）を活用した「AI 遺伝カウンセラー」開発に取り組んでいます（特許出願中）。



受賞した 佐藤杏 遺伝診療科 認定遺伝カウンセラー®(中央)

そして、この度、この取り組みを紹介した「遺伝性腫瘍の診療におけるAI活用の可能性と今後の展望」（発表者 佐藤杏 遺伝診療科 認定遺伝カウンセラー®）が第27回日本遺伝性腫瘍学会学術集会で最優秀賞を受賞しました。

より多くの患者様に遺伝診療を提供できるように、引き続き研究開発をすすめていきます。



開発したシステムのインターフェイス

診 療 科 紹 介

血液・腫瘍内科（血液）

血液・腫瘍内科 部長 田中 正嗣

血液内科では主に急性白血病や骨髄異形成症候群に対する化学療法、および同種造血幹細胞移植を行っています。これらの疾患および治療は感染症を合併するリスクが高く、全て無菌病棟で行っています。日本成人白血病治療研究グループ (JALSG) に所属し、ここで行っている臨床試験に参加し、患者さんに最新の治療を受けていただいています。また、近年は急性白血病の治療にも分子標的薬が続々と導入されており、当科でも積極的に分子標的治療を行っています。これらの化学療法でも治癒が困難な患者さんには同種造血幹細胞移植を行っています。この移植治療は当科が最も得意とする治療であり、医師や看護師のみならず、薬剤師、検査技師、リハビリテーションスタッフ、栄養士など多くのスタッフと協力しチーム医療を行っています。急性白血病の治療は数ヶ月間の長い入院治療が必要です。当院の経験豊富なスタッフによるチーム医療で患者さんの入院生活をサポートいたします。



頭頸部外科

頭頸部外科 部長 古川 まどか

頭頸部外科では4名の医師が頭頸部癌の診断、手術、薬物治療、放射線治療中のケア、治療効果判定、機能評価といった一連の診療を担当しています。頭頸部領域は日常生活に必要不可欠な機能を有するため、癌の進行やその治療によって、普段当たり前のように行っている大切な機能が失われる可能性があります。外見や容貌の変化を生じる可能性もあり、癌の根治性に加え、患者さんの職業、家族構成、趣味などを考慮した治療選択を重視し、患者さんの気持ちに寄り添った医療を目指しています。さらに、耳鼻咽喉科・気管食道科の専門知識を活かし、耳鼻咽喉・気管食道領域の様々な問題点に関して院内各部署よりコンサルトをうけ、鍛え上げた専門的技術と良好なフットワークで対処し、がんセンターの医療の質向上に努めています。非常に複雑ですが大変興味深い領域です。何かお困りの方、ご興味を持たれた方、どうぞお気軽に私たちにお声をかけてください。



新任
紹介

9月
入職



呼吸器外科
村上 浩太郎

10月
入職



乳腺内分泌外科
藤原 沙織

よろしくお願
いいたします!

抗体カクテル療法について

● 感染症内科部長 築地 淳

県立がんセンターは神奈川県内の抗体カクテル療法の拠点病院に指定され、8月25日よりCOVID-19重症化リスクを大幅に低減させる抗体カクテル療法を実施しています。本剤は遺伝子組み換えにより作成された「カシリビマブ」と「イムデビマブ」という2種類のモノクローナル中和抗体で構成され、比較的症状の軽いケース（軽症と中等症Ⅰ）に使用が限定されます。また、投与時の infusion reaction などの副作用のほか、高流量酸素または人工呼吸器管理を必要とする重症度の高い患者ではかえって増悪させる危険性があること、変異により中和活性が低下した株での効果低減（現下のデルタ株には有効）などに注意を払う必要があります。本剤適応症例に関しては神奈川県の担当にお問い合わせ下さい。

ワクチン接種協力状況について

がんセンターでは、神奈川県や横浜市の要請に応え、新型コロナウイルスワクチン接種に協力しています。8月までに医師23名、看護師53名を派遣しました。今後も、安全・安心ながん医療と並行して、県民のみなさまから求められる医療を提供できるように努めて参ります。

神奈川県

	6/23	6/27	7/4	7/11	7/14	7/18	7/25	合計
医師	1	1	1	1	1	1	1	7
看護師	1	5	6	5	1	5	3	26
実施地区	座間市	寒川町	寒川町	寒川町	座間市	寒川町	寒川町	

神奈川県立よこはま看護専門学校

	8/6	8/27	合計
医師	3	3	6
看護師	3	3	6
事務職員	1	1	2



横浜市：新横浜国際ホテル

	7/17	7/22	7/24	7/25	7/30	7/31	合計
医師	1		1		1		3
看護師	1	1	1	3	1	1	8

	8/1	8/6	8/7	8/8	8/9	8/13	8/14	8/15	8/20	8/21	8/22	8/27	8/28	8/29	合計
医師	1	1		1		1		1	1		1		1	1	9
看護師	1		1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	13

編集後記

今回も、コロナ感染症に関する記事を掲載しました。予防手段・治療手段が増えることは、がん患者さんにとっても安心材料になります。昨年度の健康診断の受診率は例年に比べて30%低下したというニュースが流れました。同時に、進行がんで見つかる方が増えているかもしれないという話を聞く度に、検診は「不要不急」ではないと改めて思います。食欲の秋、運動の秋に加えて、検診の秋にはいかがでしょうか。

病院長 金森 平和